

するこそいみじけれ、やかたといふ物にぞおはす、されどおくなるは、いさ、かたのもしはしにたてる物どもこそめくる、心ちすれは、やをつけて、のどかにすげたる物のよはげさよ、たえなば何にかはならん、ふとおちいりなんを、それだにいみじうふとくなどもあらず、我納言清少のりたるは、きよげにもかうのすきかげ、つまどかうしあげなどして、されどひとしうおもげになどもあらねば、たゞいへのちいさきにてあり、ことふね見やるこそいみじけれ、とをきは、まことにさゝのはをつくりて、うちちらしたるやうにぞいとよく似たる、とまりたる所にて、舟ごとく火ともしたる、おかしう見ゆ、はし舟とつけて、いみじうちいさきにのりて、こぎありく、つとめてなどいとあはれ也、あとのまらなみは、誠にこそきえもてゆけ、よろしき人は、のりてありくまじき事とこそ猶おぼゆれ、

〔正月揃五〕賣船の雞日

自然居士をうたへば、船のおこり、柳の一片に蜘蛛といふ虫聞えたり、日本にはじまりしは、貞享五ツのとしより、千七百六十七年以前、崇神天皇十七年庚子のとし、はじめて諸國に舟をつくりて、江を渡し海をこえ、山田矢橋のわたし舟に便船して、三里まはらぬ、ちか道出來せり、まことに國土の寶として、遠きもろこしの名物、藥種、絹糸、書物、佛像をわたし、陸勞煩なる江戸へも、京から大坂難波より、追風にまかせて、ねながら財寶を運びめぐらすたからなり、まかるに船玉の神、渡神の社、住吉大明神の札を押して、まづ正月の乗初、酒飯備へ奉り、纜をとき、碇をあげ、檣を立、帆をひき、艫を見、屋形をかざり、舳を見、星をながめ、山をうか、ひ、楫執を下知し、水子は、艫櫂棹を取なほし、蓬をた、み、順風を得ては、勇をなし、舳を扣き、船頭を諫め、唐土、天竺、新羅、百濟、契丹國に渡り、色々の禽獸種々の寶を取て、嵐にまかせて我國に戻る、

〔我おもしろ下〕船と筏の論